

## 新学習指導要領の目標・内容とこれからの陸上運動・競技の授業づくり

### Goals and content of MEXT's new Courses of Study and creating track and field classes based on those courses

池田 延行

Nobuyuki IKEDA

#### I. 研究の目的

国の教育内容の規準となる学習指導要領は、およそ10年に一度のサイクルで改訂がなされる。教育の今日的な課題や学校を取り囲む様々なテーマ等は10年を経ることで多様に変化するからである。

こうした背景から、新学習指導要領は平成28年3月に告示され、また各教科の解説も平成29年7月には文科省のホームページ上に公表された。

本研究は、新学習指導要領の告示及び解説の公表を踏まえ、特に小学校の陸上運動領域に焦点を当てて、新学習指導要領と解説に見られる陸上運動領域の目標・内容の特徴を把握して、今後の授業づくりの手がかりを得ようとするものである。

具体的な研究目的は、以下のように示すことができる。

- ①新学習指導要領全体に関わる目標や内容等について整理する。
- ②上記の結果を踏まえて、小学校での陸上運動領域の目標・内容の特徴を整理して、特に現行学習指導要領及び解説との相違点を整理する。
- ③また、今後の陸上運動領域での授業づくりの

ポイントについても整理し、重要な事柄の提言を示す。

#### II. 研究の方法

研究目的を達成するために、現行学習指導要領及び解説と新学習指導要領及び解説の比較検討を関連文献の収集と整理によって進めた。

#### III. 研究結果の概要

##### (1) 新学習指導要領の改訂のポイント

新学習指導要領では、新しい時代を切り拓いていくための資質・能力を育むことを大きなねらいとしており、育むべき資質・能力を以下の3点としている。

- 1) 生きて働く「知識・技能」の習得
- 2) 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- 3) 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

##### (2) 小学校体育科での改訂のポイント

上記のような新学習指導要領の改訂のポイント

を受けて、小学校体育科の運動領域では次のような改訂のポイントが示された。

- 1) 生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフをの実現を図る資質・能力の育成の観点から、体育科の目標及び内容の改善を図る。
- 2) 「カリキュラム・マネジメント」及び「主体的・対話的で深い学び」を進める観点から指導内容の充実を図る。
- 3) 体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動・スポーツの多様な楽しみ方を共有できるように指導内容の充実を図る。

(3) 小学校の陸上運動領域の内容（ねらい）の比較

学習指導要領全体や小学校体育科の改訂の趣旨を生かすために陸上運動領域の内容（ねらい）も新たに検討され、その中身が示された。

表1は、小学校高学年における「陸上運動領域の内容（ねらい）」を現行学習指導要領と新学習指導要領とを比較して示したものである。表1での(1)は、新学習指導要領での「知識及び技能」を、(2)は「思考力・判断力・表現力等」を、(3)

は「学びに向かう力、人間性等」の中身を示している。

表1からは、新学習指導要領での陸上運動領域のねらい（内容）の特徴を以下のように示すことができる。

- 1) 現行学習指導要領では、「技能」として示されていた中身に、「その行い方を理解する」とする「知識」が加えられた。

現行学習指導要領までの小学校体育科（運動領域）では、中学校以後の「体育理論領域」や「運動領域を扱う教科書」などが無いことから、各運動領域の「知識」に関してはねらい（内容）として提示されてこなかったことになるが、今後は「その行い方を理解する」ための「知識」を教えることが必要となってくる。

- 2) 「思考力・判断力・表現力等」では、新たに「自己や仲間の考えたことを他者に伝えること」が示された。

この新たな中身は、新学習指導要領改訂に向けての体育科の課題として、「他者に伝える力の不足」が指摘されてことによるものと思われる。

- 3) 「学びに向かう力、人間性等」では、新たに「勝敗を受け入れること、仲間の考えや取り組みを認めること」が示された。

表1 小学校「学習指導要領・陸上運動領域のねらい・内容（高学年）」の比較（――は、新たな記述内容）

	現行学習指導要領 (平成20年告示)	新学習指導要領 (平成29年告示)
陸上運動	(1) 次の運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。 (2) 自己の能力に適した課題の解決の仕方、競争や記録への挑戦の仕方を工夫できるようにする。 (3) 運動に進んで取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。	(1) 次の運動の楽しさや喜びに触れ、 <u>その行い方を理解するとともに</u> 、その技能を身に付けること。 (2) 自己の能力に適した課題の解決の仕方、競争や記録への挑戦の仕方を工夫するとともに、 <u>自己や仲間の考えたことを他者に伝えること</u> 。 (3) 運動に進んで取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、 <u>勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取り組みを認めたり</u> 、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

この新たな中身は、体育科の改訂のポイント3) で示したような、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動・スポーツの多様な楽しみ方を共有できるようにすることの必要性を示すためのものと思われる。

(4) 小学校での各発達段階における「陸上運動領域での活動の例示等」の比較

陸上運動領域のねらい（内容）は具体的な活動

を通して自薦されることになるが、「陸上運動領域での活動の例示等」においても現行学習指導要領と新学習指導要領では、いくつかの特徴的な違いを見ることができる。

表2は、「現行学習指導要領・解説」と「新学習指導要領・解説」の中身を比較して示したものである。

この両者の比較から以下のような新たな中身を指摘することができる。

表2 陸上系・学習指導要領解説（小学校体育編）の比較（平成20年解説と平成29年解説）（―は、変更した記述内容）

	小学校1年・2年	小学校3年・4年	小学校5年・6年
短距離・リレー	○30～50m 程度のかけっこ ○折り返しリレー遊び	○40～60m 程度のかけっこ ○周回リレー	○50～80m 程度の短距離走 ○いろいろな距離でのリレー (一人が走る距離50～100m 程度)
	●30～40m 程度のかけっこ ●折り返しリレー遊び	●40～50m 程度のかけっこ ●周回リレー	●40～60m 程度の短距離走 ●いろいろな距離でのリレー (一人が走る距離40～60m 程度)
長距離走	(○2～3分程度のかげ足)	(○3～4分程度のかげ足)	(○5～6分程度のかげ足)
	(●2～3分程度のかげ足)	(●3～4分程度のかげ足)	(●5～6分程度のかげ足)
ハードル走	○低い障害物を用いてのリレー遊び	○いろいろなリズムでの小型ハードル越え ○40～50m 程度の小型ハードル走	○40～60m 程度のハードル走
	●低い障害物を用いてのリレー遊び	●いろいろなリズムでの小型ハードル越え ●30～40m 程度の小型ハードル走	●40～50m 程度のハードル走
走り幅跳び	○幅跳び遊び ○ケンパー跳び遊び	○5～10m 程度の短い助走での幅跳び	○助走距離が15m～20m 程度の走り幅跳び
	●幅跳び遊び ●ケンパー跳び遊び	●5～7歩程度の短い助走からの幅跳び	●7～9歩程度のリズムカルな助走からの走り幅跳び
走り高跳び	○ゴム跳び遊び	○3～5歩程度の短い助走での高跳び	○助走が5歩～7歩程度の走り高跳び
	●ゴム跳び遊び	●3～5歩程度の短い助走での高跳び	●5歩～7歩程度のリズムカルな助走からの走り高跳び
投擲	●「 <u>投の運動遊び</u> 」を加えて指導することができる	●「 <u>投の運動</u> 」を加えて指導することができる	●「 <u>投の運動</u> 」を加えて指導することができる

○平成20年解説

●平成29年解説

1) 短距離走・リレー、ハードル走において、児童の走る距離が短くなっていること。

例えば、現行学習指導要領では、高学年短距離走の距離は50～80m程度であるが、新学習指導要領での距離は40～60mとなっている。この他にも、リレーでの一人が走る距離やハードル走での距離も短くなっている。これらの背景は、近年の児童の走能力の低下傾向やそれらと関連して「全力疾走できる適切な距離の提示」などが検討されたことによるものと思われる。

2) 中学年・高学年の「幅跳び・走り幅跳び」において、助走のめやすが「助走距離」から「歩数」に変更されたこと。

これらは、「幅跳び・走り幅跳び」や「高跳び・走り高跳び」は、リズムカルな助走が重視され、そのためには「助走の歩数」を意識することが大切であることが検討されたものと思われる。また、近年の「走り幅跳びの授業研究」において「リズムカルな助走を生み出す歩数」などが明示されてきていることなども指摘できよう。

3) 「投の運動（遊び）」を加えて指導することができることと示されたこと。

この数年来、「児童の投能力の低下傾向が著しい」とする体力・運動能力調査結果が示され続けている。こうした調査結果の背景には「投げる動作の経験の不足」などが指摘されているが、その改善策の1つとして「陸上運動領域での投の運動の扱い」が小学校段階で示されたものと思われる。この「投げる運動」の陸上運動領域への導入は大いに評価することができる。

陸上運動（競技）は、本来「走る・跳ぶ・投げる」で構成されており、「投げる」については、

特に「遠くに投げること」が大きな目標である。この「遠くに投げること」を内容とした今後の陸上運動領域での授業づくりの活性化が期待される。

#### Ⅳ. ま と め

新学習指導要領での小学校における陸上運動領域の改訂の特徴を検討することによって、陸上運動領域での「走る」、「跳ぶ」、「投げる」を通して「3つの資質・能力の育成」への道筋を明らかにすることの重要性を確認することができた。

そのためには、「解説に示された具体的な活動の例示等」による授業づくりの実施と、そこでの成果と課題の把握が急務であろう。また、「精一杯動いたとする活発な授業づくり」の取り入れも併せて検討していく必要があると思われる。

#### 参考文献

- 1) 「幼稚園、小学校、中学校、校等学校及び特別支援学校の学習指導要領投の改善及び必要な方策等について（答申）」、中央教育審議会、平成28年12月21日
- 2) 小学校学習指導要領解説（体育編）、文部科学省、平成20年8月
- 3) 小学校学習指導要領、文部科学省、平成29年3月31日
- 4) 小学校学習指導要領解説（体育編）、文部科学省、平成29年7月
- 5) 陳洋明、池田延行他、小学校高学年の走り幅跳び授業における指導内容の検討—リズムアップ助走に着目した教材を通して—、スポーツ教育学研究61号、2012年
- 6) 文部科学省、全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書